

船栄豊丸七千トンに乗船し、同十一月四日舞鶴に上陸して帰郷した。

昭和二十四年十二月中旬、新潟県庁に赴き復職の挨拶をなし、新潟県巡査として復職した。

昭和五十年三月三十一日付をもって円満退職した。軍隊・シベリア抑留足かけ七年、警察官二十六年、合計三十三年三カ月であった。その後会社員として十年働き、現在無職である。八十二歳八カ月となる。健康である。

(新潟県 長谷川 八郎)

抑留記

富山県 中葉 正義

氷見市地蔵町、紺野六平の三男として大正十三(一九二四)年八月二十九日出生。家業は漁業及び鮮魚販売。昭和六(一九三一)年、上伊勢尋常小学校入学。十二年、南土小学校高等科入学。十四年、卒業。

昭和十九年十月、現役として広島、村上旅館へ集合し、十一月一日、満州牡丹江省、満州四五三部隊輜重大隊に入隊。入隊時、地下足袋でしたが、入隊後、中古の長靴が当たりました。

昭和十六年の大動員にて牡丹江に多くの兵士が集合させられ、ほとんど南方面へ移動させられた後へ我々が入隊したので、部隊はがらんとしていました。入隊は三個中隊でした。

終戦は安東にて知りましたが、当地は離れていたため状況が分かりません。

七九旅団全部安東市外におり、毎日、特攻隊の訓練に励んでおりました。安東にて特攻訓練中で、その時はただただ呆然としていましたが、これで訓練をしないで済むとほっといたし、今後はどうなることかと心配しました。

現地召集の方は解散しましたが、不穩の状況のため再び軍隊へ戻りました。大連方面の方は無事行かれたようです。私は在満でないので、そのまま軍隊に留まりました。

終戦時は安東市内警備に就いていましたが、九月になり、ソ連の命により奉天へ集合させられました。

奉天（瀋陽）在住の日本人は、略奪、暴行、いろいろとあつたようですが、実際に見たことはない。

武装解除後九月、第四五大隊として「東京ダモイ」と言われ有蓋列車に詰め込まれましたが、列車はほとんど西へ西へと走るのので、初めて騙されたと知りました。寝るときは背中を下にできず、横向きです。列車は夜だけしか走らない。トイレには人をまたぐのではなく人の上を歩くので、ドアの近くの人はいつも雪がかり大変でした。

奉天より北安よりブラゴエシチェンスクまで十月いっぱいかかりました。十一月、黒龍江は氷が張り、ハッパにて氷を粉砕していました。

私は二十年九月、輸送途中にチフスにかかり、チタ飛行場より十一月十五日、ブリヤート州ウランウデ病院に入院しました。意識はほとんどなく、気がついたときは三月でした。病院では毎日のように亡くなられた人がいました。私も近くの人を何人も目撃しまし

た。

私自身、骨と皮になり、そこで働く人の話では、「君はよく助かったな」と言われました。五月十六日に退院しましたが、私の軍服は五月だというのに血便がしみついたままなので、死んだ人の軍服を戴き退院し、しばらく第一分所で三級者として半日労働に就きました。

毎月身体検査があり、等級が決まりました。一級者は一〇〇%、二級者八〇%、三級者は半日労働、G・F（栄養失調）者と四階級に分けられました。

七月に二級で営外労働となり、市内の缶詰工場及び製粉工場にて働かされました。三〇地区全体で二十四人くらいでしょう。第一収容所（本部）は六百人以上。第二分所・第三分所はほとんど伐採で各三百人。第四分所はほとんど製材所。第五分所、第六分所は伐採。

作業は伐採及び集積、積荷で、労役の時間は午前八時～午後四時。

伐採のノルマは、

切口二十センチ以下は三立米（立方メートル）

各一人

四十センチ以下は五立米 各一人

六十センチ以上 六立米 各一人

長さ 四・三五メートル 五・三五 六・三五

口径 五十二センチ 四十四 三十六

一立米 一立米 一立米

の三通りだけ。ノルマが達成できなかったときは食事の減配で、普通食パン三百五十グラムが、三百グラム二百五十グラムになる。

伐採は三人一組であるが、二人一組として作業しました。

労役にまつわる悲喜は、同じ同胞として管内作業者は一〇〇%、また自動車運転者及び技術者は二〇〇%、三〇〇%と非常に優遇されていましたが、ロシア側に入籍にて、皆、平等に食事をしていました。ただし、食事前に各組の作業%を積み上げるので、皆に迷惑がかからないよう一生懸命がんばらずにいられます

ん。%が少ないと肩身の狭い思いです。

労役に就くのは、医者の診断により休業になった以外は全員作業者です。

冬期間は零下三五度以下になったら一応待機し、作業係（ソ連兵）は寒暖計を見て煙草の煙を吹きつけ、零下三〇度になったら集合の鐘を鳴らします。太陽が出る十時ごろ出発し、午後二時、太陽が沈むころ帰ります。冬期間は収容所の周りばかりで、遠くへは行きません。

労役に耐えられない者は医者の診断にて休業何日と入室し、見込みのない者はその都度、本部へ送還され入院です。健康管理は自分でするだけ。お腹が空くのいろいろな野草を食べた人もいたが、栄養失調で下痢したらもう最期です。

朝、点呼して出発しますが、伐採で山の奥まで各組百メートル単位で入るので、最後の組は集結地まで大変です。寒いので足をたんたん踏んで待ちますが、体力がないので伐採の木をまたいで来ることができず、夢遊病者の如く材木を迂回して、ただ無言で、無気力

で集まるだけです。

着衣は、初年度から二十一年は我が軍隊の防寒具でした。その後、満州の綿入りの服、二十二年から二十三年、段々とよくなり、ロシア用の綿入りで、最後の年は皮のシューバが、また靴はカートンキ（フェルトを圧縮した品）、帽子もロシア軍人の払い下げ品でした。

最初の年は満州から持参の高梁飯でしたが、後に燕麥、粟、大麦、ジャガイモが穀類として支給されました。

一日の糧秣は 穀類四百グラム、砂糖一五グラム、野菜八百グラム、煙草（きざみ）五グラム（五本）、肉類不明。

秋の期間は全員山へ出かけ、きのこが沢山出るので、一人マータイ（麻袋）に一杯取って来るのです。ソ連の命による。一部は糧秣受領の野菜となる。

休日は一週間に一回ありました。

収容所の建築は、ロシア特有の丸太材を積み重ねた建物で、電気もなし。窓は二重窓でした。便所は、兵

舎より少なくとも三十メートル以上離れているため、冬期間は大変でした。採暖はペーチカが三カ所ありました。起居は上・下に一人ずつ、計四人でした。南京虫に刺され大変苦勞しました。

二十年、二十一年、二十二年とほとんど山での生活でしたので、「日本新聞」も来ましたが、ただ眺めるだけ、体がひどいので関心がありません。

二十三年六月に「ダモイ」と言われナホトカに来て、初めてハバロフスクの梯団と一緒にになりましたが、二年も三年も先に洗脳された者ばかりで、我々は常に反動分子とみなされ、そこで人員をばらばらに編成され、徹底的に民主教育がなれました。私は若かったので青年行動隊にさせられ、一般大衆を引率、常に討論、文化活動の先頭に立たされました。夜寝るまで学習また学習、追いつけ、追い越せの毎日でした。民主教育が徹底し、ちょっと口を滑らすとすぐ反動呼ばわりされ、つるし上げに遭い、自己批判させられました。作業も、ソ同盟を強化することは民主陣営を強化することであり、誠心誠意、一生懸命に働かざ

るを得ません。

二十二年ごろ、シラミが湧き、責任者が罰せられ
 Cholman (獄舎) に夜だけ入れられました。

飢えと寒さと重労働の中では自分だけが頼りであ
り、他人は守ってくれない。どれだけ美句を言われて
も自分の体は自分で守る、これに徹するのみ。

二十二年ごろ日本へ手紙を出させられました。その
返事が一年くらいで届き、二人の兄は無事帰還したと
の報に無性に帰りたく、これは死んではいけない、親
に心配をかけないようにと一層体に気をつけるように
しました。

ウランウデ地区から二十三年六月にダモイと言われ
てナホトカ地区に着きましたが、船が一向に来ず、そ
のうちにナホトカ地区の労働大隊へ編入させられ、毎
日ナホトカ港拡張のため、岩盤に二人一組で火薬の入
る穴を午前中一個、午後一個と掘りました。眼下に喜
び勇んで日本へ帰る同胞を見て、大変うらやましかっ
た。十一月になり「今年はこれで終了」と聞き、また
来年までかたがっかり。また一冬過ごすのかとショッ

クでした。

明けて二十四年、再びナホトカ(三八〇分所)へ入
り毎日船を待ちましたが、六月になっても一向に船が
来ず。そのうちにソ連の命により、当分所より三百人
ほどスーチャン地区へ、ジャガイモ及びキャベツの植
付けに出張させられました。植付けが終了したとき半
分ほど帰り、その都度帰る人がいましたが、私は技術
者(大工)としていたので三十人ほど最後まで残され
ました。

そして十一月三十日、今年最後の船(信洋丸)に乗
船。船がナホトカを離れた途端、将校連中が日の丸梯
団として氣勢を上げていました。また、このほかに巡
査及び憲兵、特務機関の方々がいました。

舞鶴港に十二月二日着。直ちに要求書を復員業務官
に突きつけ、要求が通らなければと上陸拒否を続け、
五日に上陸、復員手続等を一週間ほどして、十二日に
帰宅しました。

軍隊及び抑留と五年間も空白があり、皆は職に就き
ましたが、私は赤呼ばわりで大会社へ就職できず、い

つも中小企業または請負業者の労働でした。しかし、ソ連で鍛えた寒さに打ちかつ精神力、忍耐力、また食料不足を身をもって知り、食物のありがたさを特に痛感いたし、また何事にも創意工夫をこらす生活には自信を持ちました。

抑留記

富山県 谷村 文平

出生から入隊

大正九（一九二〇）年、富山県西礪波郡西太美村で生誕。父は当時村長、比較的豊かな農家の五番目として出生。全国的な流感のまん延で重い肺炎を病み死線をさまよう。死ぬかもと父に抱かれた写真が残っている。

小学校時代は最低の虚弱児童、中等学校でも結核で助からぬ第一号と見られていた。小学校時代、生家没落、分家の叔父の養子となる。農学校から国立盛岡高

等農林学校（農芸化学科）に進む。この頃から体力も人並みに到達。日本は満州事変から支那事変へと移行する。昭和十五（一九四〇）年卒業、当時学生が一番あこがれる国策企業、南満州鉄道株式会社に採用された。日露戦争でロシアから獲得した鉄道、鉱山、港湾を経営する会社で、当時はまさに花形企業であった。

配属されたのは牡丹江鉄道局。直接ソ連の軍港ウラジオストク、陸軍のウオロシロフと相對峙する要衝であることがひしひしと感じとれる。ここで近隣に住むロシア人の家でロシア語の個人レッスンを受けたのは、置かれた地理的環境から至極当然であった。

適齢期にあつたので昭和十五年、牡丹江で徴兵検査、甲種合格。本土での入営を希望、昭和十六年一月帰国、二月入営。敦賀歩兵第一九連隊通信中隊である。師団は第九師団（金沢）であるが、当時既に中国東北部牡丹江市に駐屯、歩兵第一九連隊は更に牡丹江市と国境線の間地点の穆稜^{ムルン}にいた。凶らずも入営前の勤務地に舞い戻る形になった。入営は二月、七尾港から盛大な見送りで羅津に上陸、鐵路牡丹江に送られ